

天津地域史研究会編

『天津史——再生する都市の

トポロジー——』

東方書店 1999年 ix + 253 + 29ページ

たか た ゆき お
高 田 幸 男

I

近年中国史研究において活気のあるジャンルのひとつに都市史研究がある。その日本における核のひとつである天津地域史研究会は、今までもシンポジウムを開催したり、文献目録 [貴志・劉・張 1998] を刊行するなど精力的な活動を展開してきた。本書は同研究会による待望の天津通史である。

出版元である東方書店は、以前に『上海史』および、その補編的な性格を持つ『上海人物誌』を刊行しており [高橋・古厩 1995; 日本上海史研究会 1997], 本書が「中国都市通史もの」の第3冊目となる。そのためページのレイアウトが前2冊と近似しているが、企画編集は天津地域史研究会が独自に進めてきたものであり、あくまで別個の著作である。実際、本書はその外見とは違って、『上海史』とは大きく異なったスタイルをとっている。評者は、『上海史』の編集・執筆にかかわっていたがゆえにこの書評の依頼が来たものと理解しており、以下『上海史』を念頭に置きつつ、書評を進めることにする。

II

本書は序章と以下のような10個の章、および関連するコラムや附録からなっている (かっこ内は執筆担当者)。

序章 本書の視角

(リンダ・グローブ, 浜口允子, 貴志俊彦)

第1章 歴史と都市像の変化 (浜口允子)

- 第2章 華北経済の中心都市 (リンダ・グローブ)
 第3章 港と交易 (内田知行)
 第4章 情報社会の誕生 (貴志俊彦)
 第5章 外交と政治のまち (川島真)
 第6章 租界・小さな国際社会 (吉澤誠一郎)
 第7章 都市下層民と幫会・黒社会 (渡辺惇)
 第8章 天津のなかの日本租界 (小林元裕)
 第9章 メディア文化とナショナリズム (貴志俊彦)
 第10章 建築と都市施設 (寺原譲治)
 あとがき

(リンダ・グローブ, 浜口允子, 貴志俊彦)

執筆者はいずれも近現代中国の農村工業、地域社会、政治外交等各分野の研究者で、その関心の共通項は都市天津というより、むしろ北京—天津を軸とし西北までおよぶ政治的・経済的・文化的空間である。そのため天津を、華北～西北地方の後背地のレベル、全国レベルおよび首都北京ないし南京との関係という、重層構造に位置づけることを強く意識した叙述となっている。

以下、各章の内容を紹介することにしよう。

序章は、まず中国都市に関する出版や研究において、上海への関心が突出していることに触れ、そこに「上海さえみれば、中国の都市の発展や、都市社会における中国と欧米との文化的なかわりが理解できるという、暗黙の前提があるようにみうけられる」(2ページ)とし、上海偏重の問題点を指摘する。そして、中国第2の開港都市であり、華北から西北に至る地域の経済的中心であると同時に日本との関係も密接で、また首都北京に近く政治的性格が強いという天津の特徴をあげて、都市史研究における天津史研究の重要性を強調する。

そこで、こうした天津の特徴を鮮明にするため、本書は断代史的なスタイルではなく、前掲の章立てのように、天津の持つ諸側面ごとに通時的に描く手法をとる。序章では、それを万華鏡のなかの色相にたとえ、「そこに映しだされた総体をもって天津史を語ろうとするものである」(4ページ)とし、従来の歴史的事件中心の近代天津史とは異なり、都市

空間の発展過程を重視するために取ったスタイルであると説明している。副題に「トポロジー」とあるのは、中国の地方志の構成を意識しているのであろうか。附録として、地方志のように「天津史大事年表」、あるいは「1921年天津在住著名人一覧」を掲載し、また『上海史』同様コラムを設け、さらに立体的にしようとしている。

さて第1章は、天津の開港以来の変遷を描く、いわば総論に相当する章である。そこでは、まず天津が20世紀前半に急速に膨張した都市であり、その人口増加速度は中国では上海のみが比肩しうるものであったこと、その発展の歴史的要因として、近代以前から持つ首都防衛の軍事的拠点、および交通の要衝、華北平原から遠くモンゴル高原にいたる一帯を後背地とする位置が、指摘される。そのうえで近代天津の発展を促したのは、外国勢力とそれに対抗する清朝である。ここで、清朝ないし直隸総督李鴻章・袁世凱の積極的な軍や鉱工業の近代化、都市建設が強調され、そのもとに、「官民相補う、しかも互いに呑みこまれることのない『自治』をもつ行政運営のかたち」(15ページ)ができていったとする。この政治的拠点と経済都市の比重は、時代とともに変化する。民国北京政府の時期に入って政争が激化すると、軍人・政客が謀議をおこなったり隠棲する「政界の奥座敷」となり、南京政府期には、国政から距離を置く「北方政治の中心地」で、上海に次ぐ第2の経済都市となった。そして日中戦争直前には日本の影響力が増加、戦争勃発後は「満洲国」と関内各地を結ぶ要地として、戦禍をこうむった上海に取って代わり、戦後は国共抗争の一点となる変遷が述べられる。

第2章では、華北経済の中心としての天津を見る。天津は首都の入口であるという政治的理由から開港されたが、天津が華北商業の中心地でもあったため、これにより華北の市場に外国製品が流入して農村綿工業に打撃を与えたとする。これに対する中国側の対応として、洋務期以来の産業振興、とくに袁世凱による輸入代替工業の育成が高く評価される。その代表例が織機等を供給した三条石の金属加工業の成長であり、また日本の技術指導にも言及される。そ

して天津の輸入代替工業は輸入品の流通ネットワークに参入し、1930年代には内陸アジア一帯を後背地とするようになったとする。

とくに興味深かったのは、かつての「官僚資本」概念を批判したうえで、法的未整備の状況下では「大規模な経済組織ならば、必ず政治的影響力を持つ後援者が必要で」あり、「官僚資本」の企業と民間企業の違いは、後援者の「保護が有償か否かにある」とする指摘(39ページ)や、天津の外国銀行、中国人による近代銀行、中国在来の銭荘・銀号が、「それぞれ独自の取引を専門とし」銀行業を分担していたという指摘(49ページ)である。

第3章では、天津開港後の各国航運企業の競争や「官督商弁」(政府監督下の民間経営)の輪船招商局による中国側の対抗、19世紀末以降の鉄道網形成にともなう後背地の拡張と港を中心に、交通網の発展を概観する。そして首都の玄関口である天津は開港以前、「民船」(木造帆船)による運河や海路経由の漕運の中継点として繁栄していたが、列強の租界設置とともに租界埠頭が建設され、外国汽船が到来して各国間で競争が展開されたこと、在来の民船は大型汽船によって沿海から駆逐されるが、内陸輸送でむしろ発展し、鉄道網整備後も鉄道沿線までの輸送手段として存続したことなどを指摘する。

貿易相手としてしだいに比重を増していったのは日本である。とくに満洲事変以後、天津をその市場圏に暴力的に組み込んだとして、日本による密貿易や、天津港の対外貿易権独占や戦略物資調達のための塘沽新港建設の着工をあげる。このうち塘沽新港については、中国人労働者の徴用にふれつつも、「戦争がなかったら、そして中国北方の開発を軽んじていた南京国民政府だったら、やらなかったかもしれない」(76ページ)とする。ただ叙述が1949年で終わるため、新港建設の歴史的意義はあまり明確に示されてはいない。

第4章はその前に挿入されたコラム「華北の郵便配達センターへ」とともに、通信ネットワークの発展を概観する。そこでは、中国初の電報線が軍報用として李鴻章により天津・塘沽間に敷設され、以後10年ほどのうちにチベットを除く全国に通信網がで

きたこと、戦乱による南北通信の途絶を恐れて海底電線が敷設されたことなど、清朝下の急速な通信事業整備とモデルとしての天津の役割を指摘する。そして通信技術者の育成や電報の利用法、租界郵便局等外国の握る通信権の回収問題、あるいは短波無線普及の遅れや国民政府内の通信管理権をめぐる争いなどを紹介する。

李鴻章は上海を全国の通信拠点と考え、国際通信も上海経由となり、民国建国以後の天津は通信における重要性を低下させる。日中戦争期、日本によって中華民国の通信網は破壊され、天津は他の日本支配圏とのあいだの局地的通信網に組み込まれたとする。最後に天津における電話の普及過程を紹介する。

そもそも中国近代史研究において通信事業は比較的手薄な分野であり、評者は本書のなかでもとくに興味深く読んだ。とはいえ、義和団事件の際の電報・電話線の破壊を「八か国連合軍の侵略によ」とする(87ページ)など不可解な点もあり^(注1)、また一般に知られていない事実が多いためもあって、叙述は全国的状況や技術的なことに関する説明に傾きがちである。

第5章では、近代中国の国内・国際政治における天津の役割、および天津に凝縮された近代中国の政治文化を概観する。清末の外交権は総理各国事務衙門(1861年に設立された清朝政府の外交機関)に一元化しておらず、上海と天津を中心とする「北洋システム」が形成され、天津は外交交渉の舞台となり、内外の情報も集中し、そのなかで、のちの「北洋軍閥」の人材が育成されたとする。そして一時期条約未締結国の使節は北京入城が許されず、天津が条約交渉の場となったこと、朝鮮も北洋大臣の管轄とされたため朝鮮の開国をめぐる交渉の舞台にもなったこと、直隸総督時代の袁世凱が日本人顧問を多数招聘したことなどを紹介する。

民国に入ると外交の一元化が求められるが、「政界の奥座敷」天津は国際政治の裏舞台ともなる。そこで、ここを基盤として直隸派や一線を退いた「寓公」と呼ばれる政治家・軍人たちのありさまが描かれ、さらに南京政府期では、張学良軍や閻錫山軍が天津を財源としたことや、国民党の勢力浸透はこれ

ら地方勢力に阻まれたこと、交渉署の廃止により天津の外交上の地位が低下したこと、その一方で日本の各種工作がおこなわれたことが描かれる。

アクターごとに描く政治の裏舞台は天津ならではのものであり興味深い。途中挿入される都市行政の話(124~126ページ)は、むしろ第1章で叙述されるべきであり、多少錯綜の感がある。

第6章は、租界の風景からそこに生きる人々までを描く。租界は治外法権の開港地を象徴し、断代史的な『上海史』でも、日本人社会も含めて一章を設定していた。本章では租界を「近代中国と欧米・日本との政治的・経済的・文化的な交流・対峙の場」(136ページ)ととらえ、上海とは対照的にのべ9カ国がそれぞれ租界を設置した複雑な様相と、列強の本国人・植民地人のほか、買弁や寓公などの住人、そして租界がもたらした影響を描く。

ここでは、イギリス租界は上海同様、納税人大会が「ろうしがい董事会」(理事会)を選出するため1920年代半ば以降、中国人エリートに政治参加の道が開かれるが、フランス租界のように領事の権限が強い租界もあり、自治のありようは一様ではなかったこと、あるいは租界ごとに分断された警察権が犯罪取締の障害となったことなどが紹介される。租界の影響としては、『上海史』が強調しようとした文化の融合にはあまり触れず、租界において限定的ながらも中国人と外国人の協働により民主主義、法治主義が実践され、また政治的自由や私的所有権が保障された意義を強調する。

最後にナショナリズムをとりあげ、租界拡張への反対運動や租界回収の運動を紹介するが、その初期には買弁の多数を占める広東人や寧波人に対する天津人の反発が強かったことも示唆する。だが、このような意識から、『上海史』が指摘する移住地上海へのアイデンティティを基盤とする「上海人」意識、「上海ナショナリズム」に相当するものが形成されてくるのか否かには触れずに終わっている。

第7章は下層社会と開港都市・移民都市につきものの「黒社会」を扱う。ここでは、20世紀初頭から1920年代末まで天津に毎年3万人も人口が流入したこと、1928年の失業人口が30万人にのぼったこと

(ただし男女人口なので、中間層の「専業主婦」も含まれるのではないと思われる)、外地から流入する乞食には、農閑期の食費を節約するため市内の「粥廠」(貧民に粥を配給する施設)に集まる農民も含まれたことなどを紹介し、近代天津が他の租界同様、金持ち・権力者が住む租界等市中心部と、貧民が散在する周縁部とからなっていたとする。

黒社会については、都市の拡張や鉄道敷設などによって活動拠点が移動したこと、最大の拠点、南市はゴシップ情報の発信地でもあり、日本の特務の有力な情報収集基地でもあったこと、天津は土着のやくざ「混混児」が強く、その多くは「脚行把頭」(荷運び人夫の頭目)となったこと、「紳商」(科挙の学位を持つ名士や大商人)と交流し社会秩序に貢献する「袍帯混混児」もいたこと、外来の青幫は混混児・脚行と三位一体化することで勢力を拡大したこと、日本の特務と天津青幫は相互利用の関係にあったことなどが紹介される。そして天津と上海の青幫の違いとして、天津青幫は北洋軍閥と密接な関係を持っていたが、脚行の強固な組織を基盤とし、上海のように表の世界に勢力を伸張することも政権の興亡に大きくかかわることもなかった点、その大半は日本軍部に協力し、または利用されたが、大部分が1949年以降も国内にとどまった点を指摘している。

第8章は、日本租界を中心とする日本人社会を描く。本章は冒頭、今や一般の日本人にとって「天津甘栗」ぐらいしか思い浮かばない天津が、戦前の日本人には上海同様、「一番近い『西洋』」、「もっとも簡単に『外国』が経験できる小国際社会」だったことを述べる。そして、天津の日本租界は中国における最大の日本専管租界だったが、その開発・市街形成には中国人が大きく寄与したこと、日本人の増加は清国駐屯軍をターゲットにしたものだったこと、租界の議決機関である居留民会には中国人議員も多数いたこと、上海と異なり租界行政委員会は地元業者が多数を占めたが、天津日本人商業会議所では日本に本拠をもつ大企業が優勢だったこと、またアヘン・麻薬の取引が日本人の活動の「裏の顔」で、天津在留日本人の自治組織である居留民団も中国人経営の特殊旅館におけるアヘン喫煙を黙認して、居住税を

財源に充てていたことなどを紹介する。

30年間一応平穏だった日本租界は、1930年代に入ると謀略と戦争の渦に巻き込まれる。とくに、1920年代末、日本製品ボイコットなどの中国ナショナリズムに直面するなかで、天津の居留民団・商業会議所が各地に呼びかけ対抗しようとしたのに対し、上海の居留民団・商工会議所がそれを阻止したこと、関東軍の謀略である天津事件では、真相を知った居留民の反発を抑えるために支那駐屯軍が日本租界に戒厳令を布いたこと、不況のなかで天津在留日本人もやがて冀東密貿易に参入していったことなどが、在留日本人の揺れ動く心情を示していて興味深い。

第9章はメディア文化である。第4章が通信というハードが中心だったのに対し、こちらはその上に展開されたソフトで、ともに貴志氏が担当している。本章では冒頭、マス・メディアは融通無碍のように見えるが、言語的障壁によって分断されているだけでなく、「新聞の報道対象やその社会的機能も違う」(210ページ)点を指摘する。天津におけるメディア第1隆盛期は清末新政期で、民国に入ると多様なマス・メディアが急速に発展するなか、天津は「華北新聞事業のセンター」、「マス・メディアの拠点都市のひとつ」に成長する。天津の新聞は、新聞の種類数では北京や広州には及ばないものの、論調ははるかに多様かつ柔軟で、上海と同様、飛び抜けて広範な販売地域をもち、ときにナショナリズムを煽動したとする。

そして以下、具体例として天津の全国紙『大公報』とナショナルな論調の『益世報』、大衆紙『商報』、『庸報』をとりあげる。そこでは、安徽派の御用新聞となって人気を失った『大公報』が、復刊時に「不党、不売、不私、不盲」を掲げたが、蒋介石の動向やスポーツニュースなどによって部数をのぼしたこと、『益世報』は知識人・経済人のナショナリズムを代弁するとともに煽っていたこと、同紙は一面商業紙として評価されていたこと、ゴシップや娯楽記事に力を入れた『庸報』は、1935年に日本の特務に買収され、39年には日本軍部が後援する国策新聞として天津最大の発行部数となったことなどを紹介する。

本章も、通信同様、日本の概説・通史ではあまり言及されることがなかったテーマで、紙面構成の变化など、天津に限らず全国で見られた現象に言及される。またとりあげられるのはほとんど中文紙で、天津の欧文紙の全国的位置づけ、中文紙との関係などには触れられず、冒頭のメディア分断の指摘は宙に浮いたままとなっている。評者としては、新聞人が上海との間を頻繁に往来している点に興味を覚えたが、深く論じられてはいない。

第10章は前章までと趣を変え、街の景観を織り込んでいる歴史的建造物を紹介する。路上観察のためのガイドともなっており、新たな「天津ファン」を獲得するためのよい企画である。ただ「生きた建築博物館」(4ページ)は天津に限ったことではない。それぞれの都市に、数十年から数百年の年月を経てさまざまな物語を秘めた建物が併存しているのであり、今それが新たな開発によって失われようとしているのである。

III

以上、多岐にわたる内容を、あまり要領を得ないまま紹介してきた。

それぞれの視角から天津を立体的に描く試みは、おおむね成功しているといえよう。たとえば『上海史』では、寧波や蘇北には触れられても、江南諸都市を含めた後背地、より広く長江中・上流や南北との関係については、充分に叙述されていないのに比べ、目配りははるかに効いている。本書は、天津・上海のような広域に影響力を持つ経済的文化的センターを総合的に描くためのひとつのモデルとなるだろう。

そのうえで、以下のような問題点が指摘できるだろう。

まず、このように独立性の強い各章間で表記の統一をはかるのは難しいことではあるが、解放か「解放」か、満州国か「満州国」か、といった歴史観にかかわる重要な語の表記は、最低限統一をはかるべきではなかったか、という問題である。関連して、やや些末なことになるが、「アメリカ海軍陸戦隊」

(26ページ、大事年表19ページ)のような中国語文献のままと思われる表記(アメリカの海兵隊は海軍とは別個の組織である)などもまま見られ、やや未消化な印象を与える。

つぎに、それぞれの視角がうまく統合されているかということ、やはり多少問題がある。

都市行政については、前述のように第1章と第5章にまたがっており、省レベルの行政や中央政治の記述と錯綜している。第5章には、1930年代の自治制の担い手の多くが清末民初の自治推進者だったとあるが(126ページ)、第1章のいう「官民相補う、しかもお互いに呑み込まれることのない『自治』」の具体相やその変遷など必ずしも明確ではない。

また分野別でも、都市行政の重要な一部門である教育や衛生などが欠落している。教育については、2つのコラム「南開大学と嚴修、張伯苓」、「北洋大学をめぐる人々」で取り上げているが、都市全体の各種教育の発展にはほとんど触れられていないため、「閲報処」(新聞閲覧所)や社会教育弁事処が突然登場することになる(212ページ)。コラムでも触れているように、清末の天津や直隸省は上海・江蘇省などととも、近代教育導入の先例として貢献している。ただ研究の蓄積が少なく、章立ては見送られたのだろう。前述のように第4章の通信や第9章のメディアの叙述の重心が天津から全国的状況へ流れる傾向も、中国近現代史全般における当該方面の研究の薄弱と、それにともない真の意味において中国近代史の通史・概説がないことを反映しているものであり、評者も含めての課題としなければならない。

そして最後に、本書が中国都市史研究における貴重な成果であるがゆえに、その叙述が「断代史的」に1949年で終わっていることが、なおさら残念でならない。首都の玄関口として、中央政治の奥座敷として、華北経済の中心として成長してきた天津が、中華人民共和国の成立と首都の北京復帰、および社会主義化によって、いかに変貌したのか。さらに改革開放政策のなかで、天津はどのようなポジションを占めるようになってきたのか^(注2)。序章に副題を「再生する都市」とした理由が説明されているが、歴史的展望の上に1980~90年代における天津の再生

をとらえることこそ、現代日本人が求めているものではなかったのか。『上海史』も、経済中心のきわめて不十分な形ながら、一章を設けて、現代と近代との一貫的把握を試みている。ぜひとも続編を期待したい。

(注1) 義和団事件における電報線・電話線の破壊が通説どおり義和団によるものであることは、千葉正史氏が詳述している。また本章では、この南北電信の途絶に際し外資系の水線陸線両連合報局が無許可で海底電線を敷設したとする(87ページ)が、千葉氏によれば、清朝はやむを得ず容認し、委託という形で利権の維持をはかって着工したという[千葉1999]。

(注2) 1989年天安門事件の直後、「上海幫」江沢民とともに中共中央政治局常務委員に抜擢されたのが、

当時中共天津市書記だった李瑞環であることを、想起してほしい。

文献リスト

- 貴志俊彦・劉海岩・張利民編 1998.『天津史文献目録』
 東京大学東洋文化研究所東洋学文献センター叢刊別輯
 23.
- 高橋孝助・古厩忠夫編 1995.『上海史——巨大都市の
 形成と人々の営み——』東方書店.
- 千葉正史 1999.「情報革命と義和団事件——電気通信
 の出現と清末中国政治の変容——」『史学雑誌』第108
 編第1号(1月).
- 日本上海史研究会編 1997.『上海人物誌』東方書店.
 (明治大学文学部助教授)